

生活習慣病は母原病か？ あるいは父原病か？



沖縄県公務員医師会 安次嶺 馨

母原病とは

「母原病」という言葉が流行ったのは、日本の高度経済成長期の1980年代であった。愛知医大小児科教授の久徳重盛氏が著した「母原病 母親が原因でふえる子どもの異常」は、100万部を超すベストセラーとなった。久徳氏は著書の中で、次のように述べている。

「極めて残念なことです。わが国が高度成長を遂げ、文明の進んだ社会になったために、文明時代の不健康児が国中に満ち溢れています。自閉症のような子、登校拒否児、風邪をひきやすい子、喘息児などが小児クリニックに多数やってきます。育児の中心的役割を果たすのは母親なので、『母親が原因の病気』という意味で、私たちは『母原病』と言っています。私の臨床経験から言って、現代の子どもの異常の60%は、母親の育児が原因となったもので、伝染病などが原因のものは40%に過ぎません」

久徳氏の「母原病」は、科学的根拠のない個人的な経験に基づくもので、正規の医学用語ではないが、子どもの病気を母親の責任に帰すということで、社会に少なからぬ混乱を巻き起こした。

DOHaD（ドーハッド）説

DOHaD（Developmental Origins of Health and Disease）説が、生活習慣病の新たな考え方として登場して20年以上になる。これは英国サウザンプトン大学教授のバーカー（David Barker）が1980年代に提唱したFetal Origins of Adult Disease（成人病胎児期起源説）から発展した学説である。すなわち、妊婦の栄養不良など子宮内環境の悪化により低出生体重児が

生まれ、成人して糖尿病、心筋梗塞、脳卒中などを発症するという説である。

バーカーは、これらの疾患を予防するために、妊娠中の母親の栄養を改善して健康な児を産むことが必須だと考えた。バーカーの一般向けの著書で、日本でも翻訳出版された「The Best Start in Life. 邦訳 胎内で成人病は始まっている」の中で、彼は次のように述べている。

「妊娠する前から、多彩でバランスのとれた食事を心がけることで、子どもは幸せなスタートを切ることができる。母親が今日食べるものは、我が子の一生だけにとどまらず、さらに次の世代の健康さえも左右するのである」

バーカーの視点は常に女性の健康に向けられており、パートナーたる男性の役割は全く考慮していない。バーカーの学説は「Fetal Origins of Adult Disease」と呼ばれたが、これは「Maternal Origins of Adult Disease」すなわち、「成人病母親起源説」と呼んでも何ら違和感はないものである。筆者が、今改めてバーカー説を母原病に例えるのは、Paternal Origins of Adult Disease（POHaD）という新たな言葉に出会ったからである。

DOHaD から POHaD へ

2018年に、Paternal Origins of Health and Disease（POHaD）という言葉がDOHaD研究者の間から発信された。中心となるのは、女性の遺伝学者Soubryらベルギーの研究グループである。SoubryらがDOHaDからPOHaDという新たな言葉を生み出したのは、母親の責任のみを追求するアカデミズムに対し、大きなインパクトを与えるためであった。これまで、無視

されていた父親の責任を炙り出す効果を狙ったものであろう。

男性のメタボリック症候群、過度の飲酒、喫煙などは精子の劣化を招き、胎児の健康、出生後の子どもの健康を害することがヒト、あるいは動物実験で証明されている。タバコ、アルコール、ジャンクフードなどが精子のDNAのエピジェネティクス変異を起こし、生活習慣病発症のスイッチをオンにすることが明らかになってきた。幸い、生活習慣を改善すれば、スイッチがオフになることも分かっている。

日本でも大隈典子氏（東北大学）らがPOHaDに関して積極的に発信している。氏によれば、高齢の父親から生まれた子どもに低出生体重児、神経発達障害（自閉症スペクトラム、ASD）が多いことは疫学調査で明らかにされている。また、父親の精子DNAのメチル化変異がASDの剖検脳においてもみられたとの報告があり、これは精子を介するエピゲノムの経世代影響の結果と考えられる。

卵子の突然変異はゆっくり数十年をかけて起こる。精子の場合は、短時日で膨大な回数の細胞分裂を経て多くの精子が産生されるので、遺伝子のプリントミスが多いのは当然であろう。妊娠・胎児研究で、ターゲットは従来、女性であった。産む性としての女性は、妊娠や胎児の異常について、多くの責任を負わされてきた。今、その矛先が男性に向けられてきたのも、女性研究者たちの執念であろうか。

生活習慣病は母親・父親から子孫に伝わる

現代社会最大の疫病たる生活習慣病は、ある意味、母原病であり、また父原病でもあるので、ヒトの誕生前から対策を立てる必要がある。肥満、糖尿病、高血圧、心筋梗塞、慢性腎不全などの生活習慣病の治療に、莫大な人的・経済的資源を用いる現在の医療から脱却し、その予防活動に資源を投入する利点は明らかである。医療者は、自らこのことを実践し、かつ、社会に向けて啓発活動を行う責任がある。

今、沖縄県の現状は、危機的状況にある。肥満率全国一、糖尿病、慢性腎不全、人工透析、アルコール性肝炎など軒並み全国トップクラスの健康問題を抱える沖縄県は、すでに次世代の健康が危険に晒されていると考えられる。全国最短命県グループに転落した沖縄県は、これまでの成人の生活習慣病予防対策に加えて、妊娠前、胎児、子どもから始める予防対策に早急に取り組まなければならないと思う。

参考文献

- 1) 久徳重盛.『母原病 母親が原因でふえる子どもの異常』サンマーク出版、1979
- 2) デイヴィッド・バーカー著、藤井留美訳、福岡秀興監修.『胎内で成人病は始まっている』ソニーマガジンズ、2005.
- 3) Soubry, A. POHaD: why we should study future fathers. Environ Epigenet. 2018 Apr 26;4(2):dvy007

